

肉用牛をめぐる情勢

令和6年11月
農林水産省
畜産局畜産振興課

【目次】

I 牛肉の需給・流通及び肉用牛経営をめぐる情勢

- 1 牛肉の需給動向 2
- 2 価格の動向
 - (1) 牛枝肉卸売価格（中央10市場）の推移 . . . 3
 - (2) 肉用子牛価格の推移 4
- 3 生産体制の動向
 - (1) 肉用牛飼養戸数・頭数の推移 5
 - (2) 肉専用種の品種別飼養動向 6
 - (3) 酪農経営における受精卵移植（ET）を
活用した黒毛和種子牛の生産動向 7
- 4 消費の動向と輸出
 - (1) 消費者ニーズへの対応 8
 - (2) 肉質形質の推移 10
 - (3) 牛肉の輸出について 11
- 5 経営の動向（生産コストの推移） 12
- 6 収益力向上・低コスト経営のための取組
 - (1) ICT機器の導入 13
 - (2) 繁殖経営での放牧利用 14
 - (3) 繁殖性の推移 15
 - (4) 出荷月齢の早期化 17

II 肉用牛改良をめぐる情勢

- 1 遺伝的多様性 18
- 2 近交係数の推移 19
- 3 新たな改良形質に係る取組状況 20
- 4 遺伝資源の保護管理 22

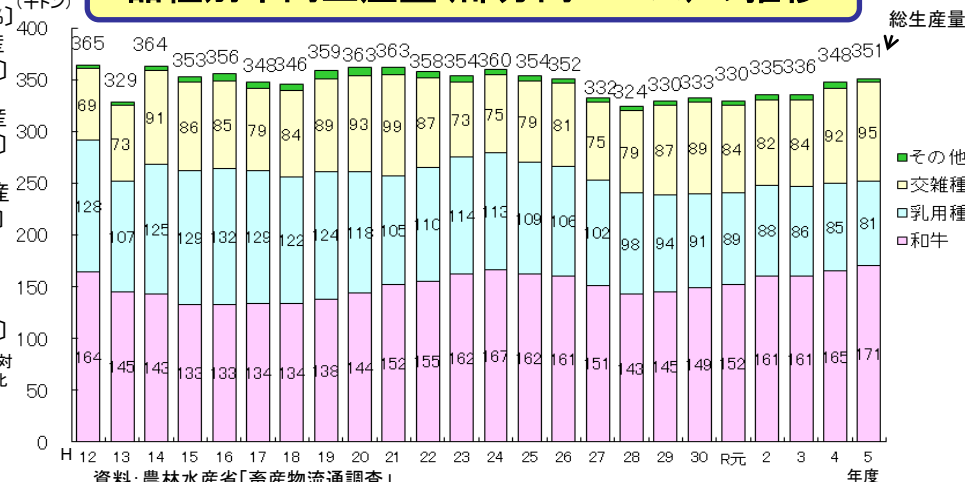
III 持続的な肉用牛生産のための新たな課題

- 1 環境負荷低減への対応 23
- 2 アニマルウェルフェアへの対応 25

1 牛肉の需給動向

-
- 牛肉需給(部分肉ベース)の推移**
- 消費量(推定出回り量)
- H13年9月 国内で BSE発生
- H15年12月 米国でBSE発生 米国産牛肉 輸入停止
- H17年12月 米国産牛肉 輸入再開
- 干ばつ 米国豪州 (23~26)
- 円安 (27)
- 干ばつ 豪州 (30~R元)
- 円安 (R4~)
- 新型コロナ (R2~)
- 米国干ばつ (R3~)
- 計 1,103 (輸入計 738)
- 338 359 365 937 (608) 898 (534) 873 (520) 806 (450) 806 (458) 814 (467) 822 (463) 832 (470) 838 (475) 870 (512) 870 (516) 865 (506) 890 (536) 868 (517) 820 (487) 850 (526) 902 (572) 933 (620) 937 (623) 931 (591) 887 (569) 881 (563) 870 (502)
- 329 364 353 356 348 346 359 363 363 358 354 360 354 352 332 324 330 333 330 335 336 348 351
- 285 240 201 410 406 410 380 366 355 352 335 309 278 277 289 278 298 310 291 256 228 208 221
- 285 240 201 410 406 410 380 366 355 352 335 309 278 277 289 278 298 310 291 256 228 208 221
- H12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 R元 2 3 4 5

品種別牛肉生産量(部分肉ベース)の推移

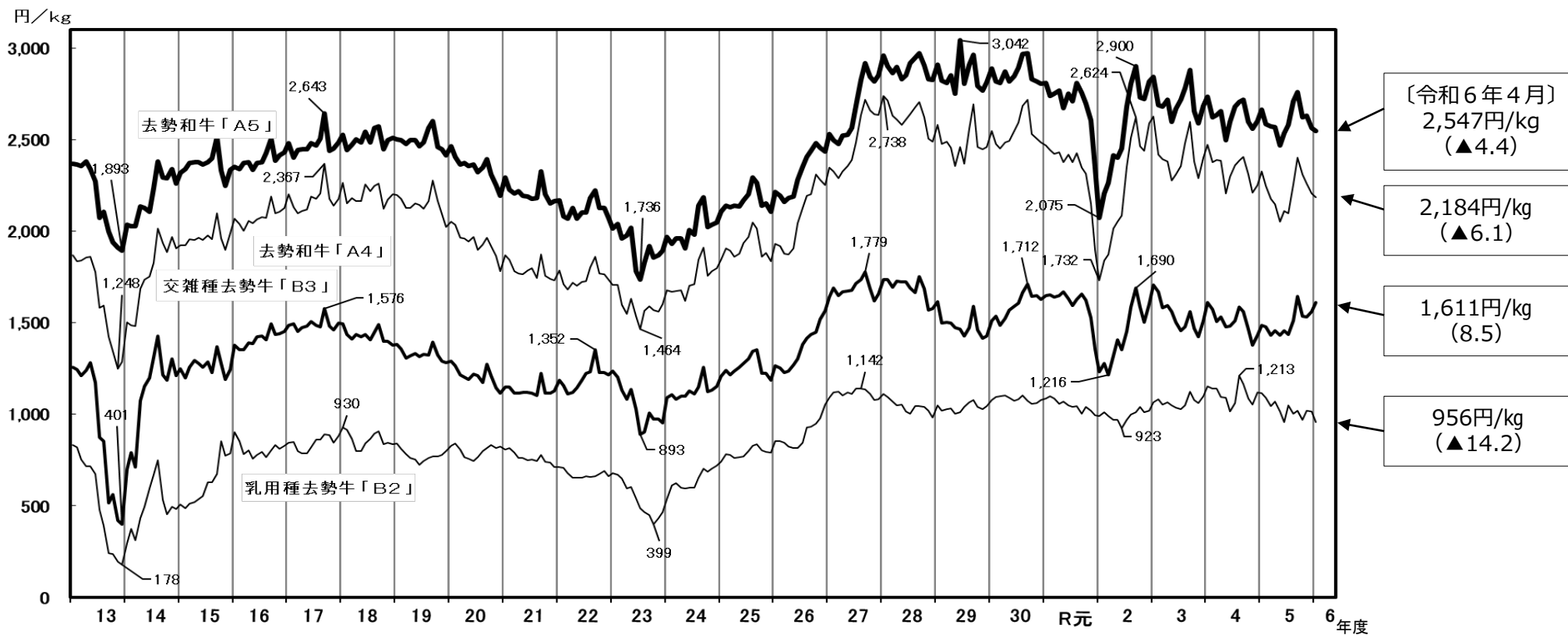


I 牛肉の需給・流通及び肉用牛経営をめぐる情勢

2 価格の動向

(1) 牛枝肉卸売価格(中央10市場)の推移

- ・ 牛枝肉卸売価格は、平成18年度以降、天候不順や国内生産量の回復、景気低迷等により前年度より低下傾向で推移。
- ・ 23年度は、東日本大震災による消費の減退や牛肉からの放射性物質検出の影響等により、全品種ともに下落したが、23年度後半から27～28年度にかけて、生産量の減少等を背景に上昇に転じ、高騰。
- ・ 令和2年2月頃から、新型コロナウイルス感染症の影響によるインバウンド需要や外食需要の減退により大幅に低下。5月以降、経済活動の再開や輸出の回復に伴い上昇し、11月にはコロナ前の水準まで回復。
- ・ 4年度以降、物価の上昇による消費者の生活防衛意識の高まり等の影響により、前年度より低下傾向で推移。



資料：農林水産省「畜産物流通統計」

注：()内は前年同月比

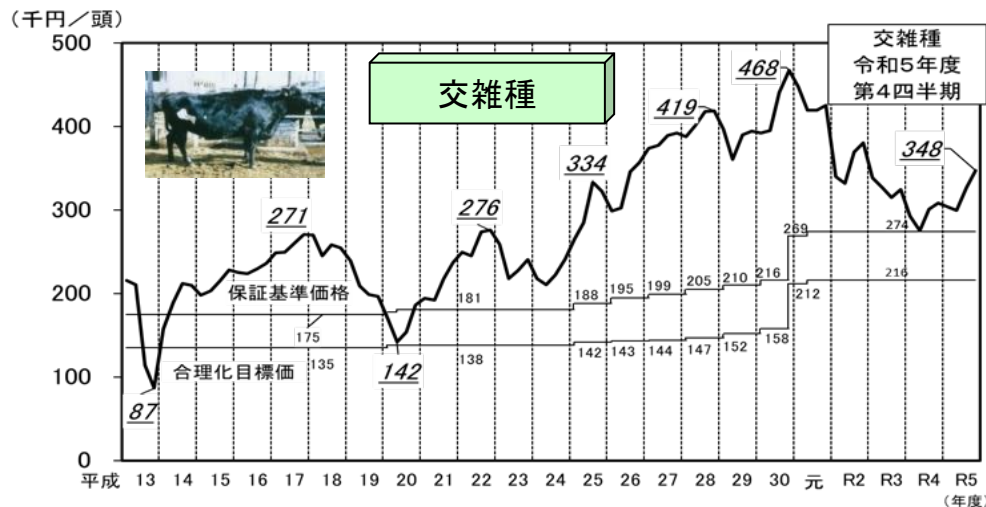
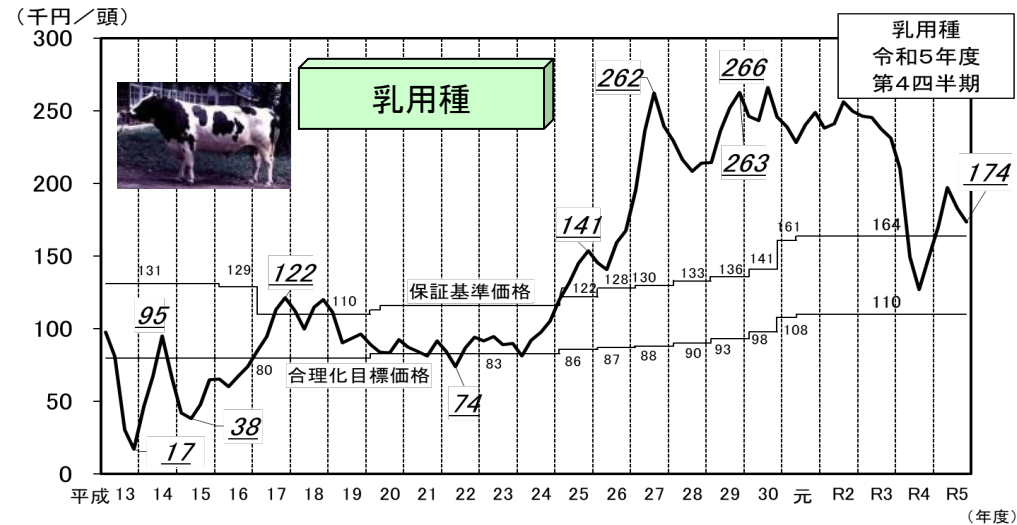
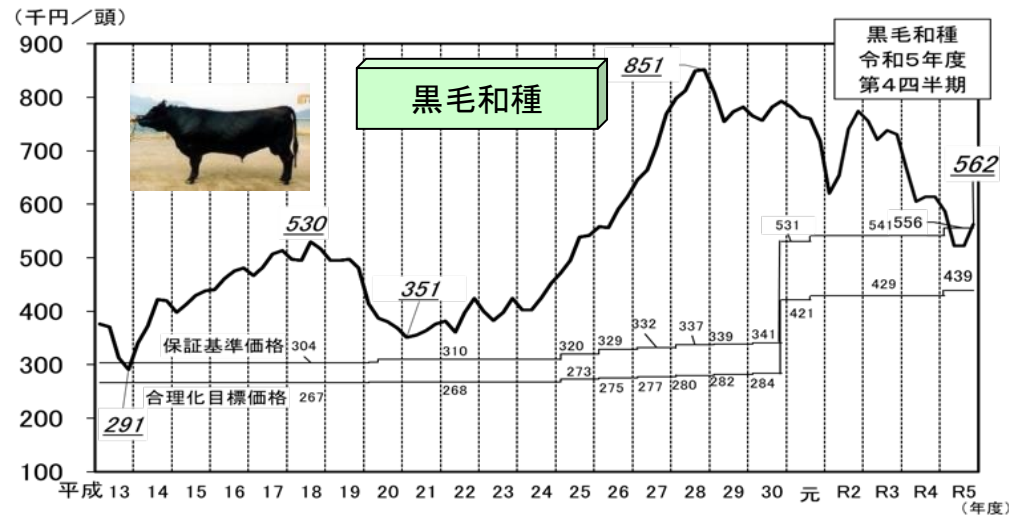
令和6年4月は速報値（食肉鶏卵課調べ）

I 牛肉の需給・流通及び肉用牛経営をめぐる情勢

2 価格の動向

(2) 肉用子牛価格の推移

- ・ 肉用子牛価格は、平成24年度以降、繁殖雌牛の減少による子牛の生産頭数減少及び枝肉価格の上昇に伴い上昇。
- ・ 令和2年2月以降、新型コロナウイルス感染症の影響による枝肉価格の低下に伴い低下。その後、枝肉価格の上昇に伴い回復したが、令和4年5月に子牛価格が下落。直近の令和5年度第4四半期では、3品種とも保証基準価格を上回って推移。



令和元～5年度補給金単価(単位:千円/頭)

品種	R元年度				R2年度				R3年度				R4年度				R5年度			
	第1 四半期	第2 四半期	第3 四半期	第4 四半期	第1 四半期	第2 四半期	第3 四半期	第4 四半期	第1 四半期	第2 四半期	第3 四半期	第4 四半期	第1 四半期	第2 四半期	第3 四半期	第4 四半期	第1 四半期	第2 四半期	第3 四半期	第4 四半期
黒毛和種	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	34.40	33.50	0
褐毛和種	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他の 肉専用種	33.20	56.60	25.90	75.19	22.70				8.20				67.63				90.50			
乳用種	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	14.50	36.60	15.90	0	0	0	0
交雑種	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

※「その他の肉専用種」については、令和2年度から算定期間を1年(4月～3月)としている。

I 牛肉の需給・流通及び肉用牛経営をめぐる情勢

3 生産体制の動向

(1) 肉用牛飼養戸数・頭数の推移

- ・ 飼養戸数は、減少傾向で推移。主に小規模層で減少。
- ・ 飼養頭数は、平成29年から増加傾向で推移し、令和5年も増加。
- ・ 一戸当たり飼養頭数は増加傾向で推移しており、大規模化が進展。
- ・ 繁殖雌牛の飼養頭数は、平成22年をピークに減少していたが、平成28年から増加傾向で推移。

区 分 / 年		平成13	18	23	28	29	30	31	31参考値 ※注3	令和2 ※注4	3	4	5
肉用牛	戸数（千戸）	110.1	85.6	69.6	51.9	50.1	48.3	46.3	45.6	43.9	42.1	40.4	38.6
	（対前年増減率）（％）	（▲ 5.5）	（▲ 4.5）	（▲ 6.5）	（▲ 4.6）	（▲ 3.5）	（▲ 3.6）	（▲ 4.1）	（▲ 5.6）	（▲ 3.7）	（▲ 4.1）	（▲ 4.0）	（▲ 4.5）
	頭数（千頭）	2,806	2,755	2,763	2,479	2,499	2,514	2,503	2,527	2,555	2,605	2,614	2,687
	（対前年増減率）（％）	（▲ 0.6）	（0.3）	（▲ 4.5）	（▲ 0.4）	（0.8）	（0.6）	（▲ 0.4）	（1.0）	（1.1）	（2.0）	（0.3）	（2.8）
	1戸当たり（頭）	25.5	32.2	39.7	47.8	49.9	52.0	54.1	55.4	58.2	61.9	64.7	69.6
うち 繁殖雌牛	戸数（千戸）	94.4	73.4	59.1	44.3	43	41.8	40.2	40.1	38.6	36.9	35.5	33.8
	頭数（千頭）	635	622	668	589	597	610	626	605	622	633	637	645
	1戸当たり（頭）	6.7	8.5	11.3	13.3	13.9	14.6	15.6	15.1	16.1	17.1	17.9	19.1
うち 肥育牛	戸数（千戸）	21.6	17.7	15.2	11.7	11.3	10.8	10.2	10.1	10	9.7	9.5	9.5
	頭数（千頭）	1,830	1,768	1,718	1,557	1,557	1,550	1,522	1,542	1,548	1,575	1,601	1,635
	1戸当たり（頭）	84.7	99.9	113.0	133.1	137.8	143.5	149.2	152.7	154.8	162.4	168.5	172.1

資料：農林水産省「畜産統計」（各年2月1日現在）

注1：繁殖雌牛と肥育牛を重複して飼養している場合もあることから、両者の飼養戸数は肉用牛飼養戸数とは一致しない。

2：肥育牛は、肉用種の肥育用牛と、乳用種の和としている。

3：令和2年から統計手法が変更されたため、令和2年の統計手法を用いて集計した平成31年の数値を参考値として記載。

4：令和2年の対前年増減率は、平成31年の参考値との比較である。

I 牛肉の需給・流通及び肉用牛経営をめぐる情勢

3 生産体制の動向

(2) 肉専用種の品種別飼養動向

- ・ 肉専用種の飼養頭数は、平成22年以降減少傾向で推移していたが、29年から増加。
- ・ 肉専用種に占める黒毛和種の割合は、横ばいで推移（約97%）。

(単位)											
品種 / 年	平成13	18	23	28	29	30	31	31参考値 ※注	令和2	3	4
黒毛和種	1,588	1,619	1,805	1,594	1,618	1,653	1,683	1,698	1,735	1,772	1,758
褐毛和種	49	32	25	21	21	22	22	23	23	23	23
その他	42	51	39	27	25	27	29	30	34	34	31
うち 日本短角種	11	9	9	7	8	8	8	8	8	7	7
合 計	1,679	1,703	1,868	1,642	1,664	1,701	1,734	1,751	1,792	1,829	1,812

資料：黒毛和種、褐毛和種、その他：農林水産省「畜産統計」(各年2月1日現在)

日本短角種：H18年以前は公益社団法人中央畜産会「家畜改良関係資料」、

H23年以降は独立行政法人家畜改良センター「牛個体識別全国データベース」(各年2月末日時点)

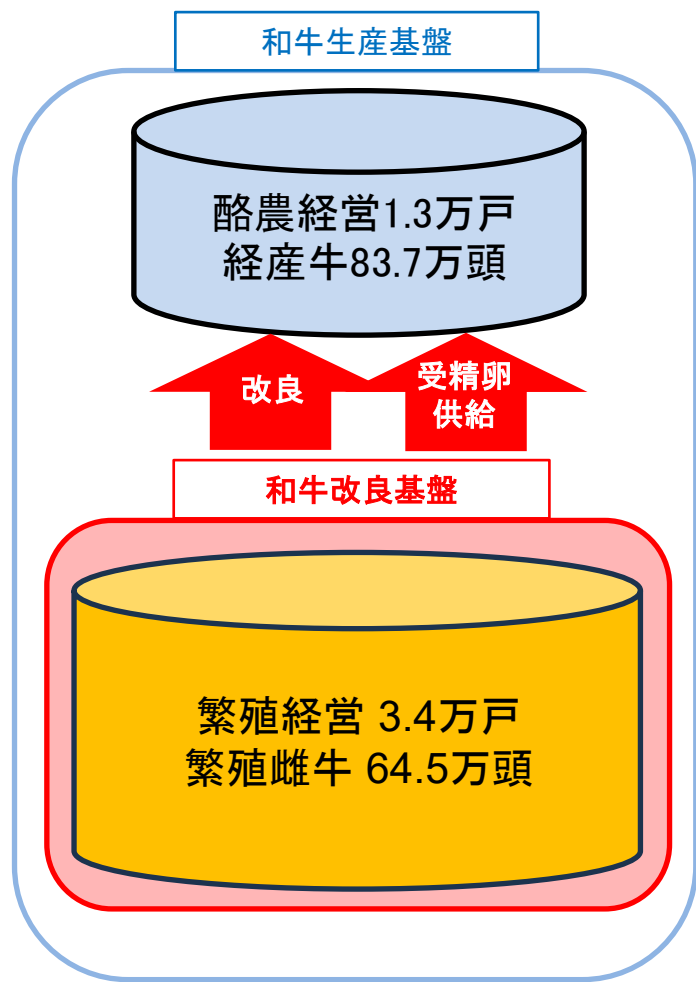
注：令和2年から統計手法が変更されたため、令和2年の統計手法を用いて集計した平成31年の数値を参考値として記載。

I 牛肉の需給・流通及び肉用牛経営をめぐる情勢

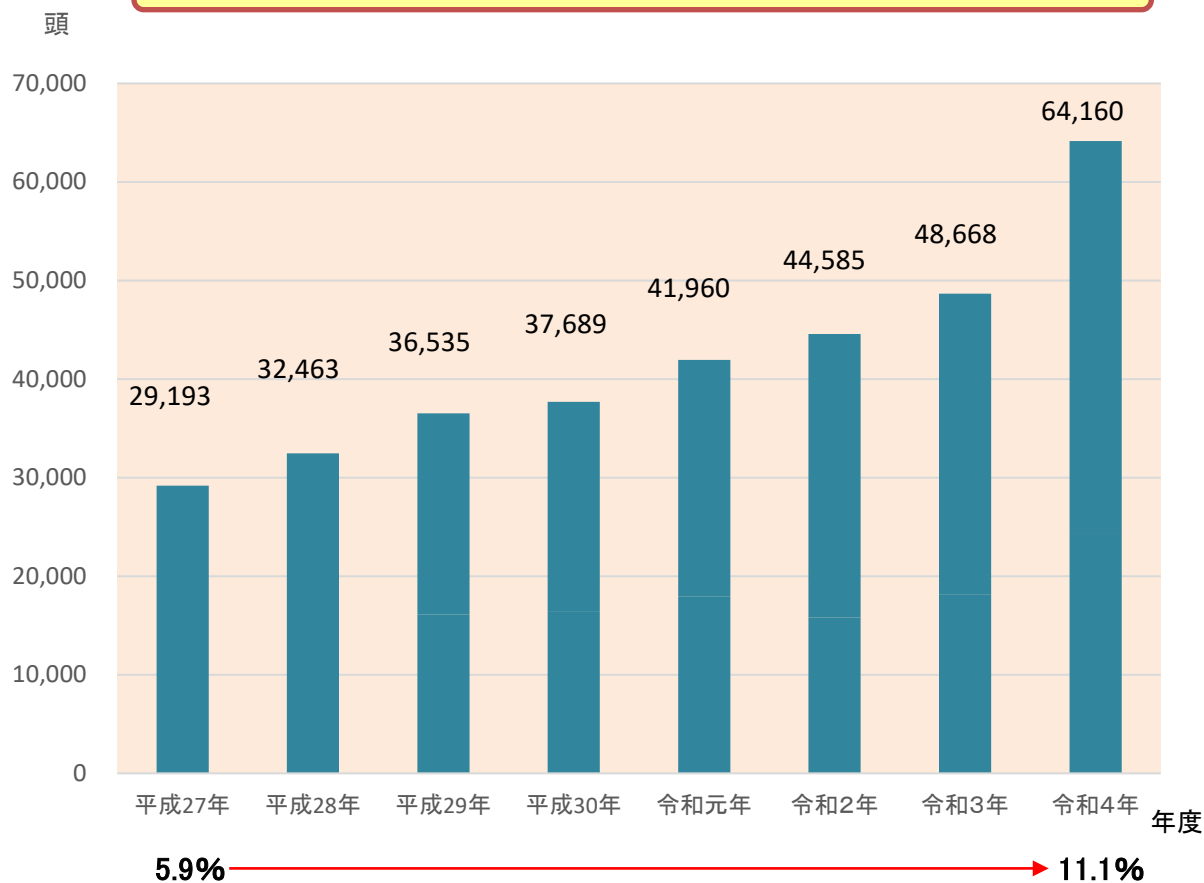
3 生産体制の動向

(3) 酪農経営における受精卵移植（ET）を活用した黒毛和種子牛の生産動向

- ・ 受精卵移植（ET）技術の普及などにより、酪農経営において、ETを活用した黒毛和種子牛生産が年々拡大。
- ・ 和牛繁殖経営は、和牛の改良基盤として、また酪農経営に対する受精卵供給源として、和子牛・和牛生産において不可欠な経営体。
- ・ 我が国の持続的な黒毛和種生産を行うためには、繁殖経営の生産基盤の維持・拡大が重要。



酪農経営由来のET活用黒毛和種子牛の出生頭数の推移



黒毛和種出生頭数に占める
乳用種由来ET活性子牛のシェア